

「洗礼者ヨハネとイエス」（マタイ一章二―一〇節）

1 先駆者

今日は待降節（アドベント）第三主日です。洗礼者ヨハネ（バプテスマのヨハネ）とイエスの関係を振り返りながら、クリスマスのことを考えてみたいと思います。

福音書の終わりはどこか、マタイだけでなく四つの福音書全部について、その終わりはどこか、何か。その答えははっきりしていて、死人のうちから甦ったイエスが天に挙げられたところです。

それなら始まりはどこか、それはじつは、洗礼者ヨハネの登場です。マタイとルカはクリスマス物語を最初において、それが始まり、人としてのイエスの人生の始まりであることは間違いありませんが、メシア、救い主としてのイエスの宣教の生涯という観点から見れば、始まりは、イエスが三十歳でガリラヤで宣教を開始したということであり、それに先だって現れ、イエスの道ぞなえをした、とりわけイエスに洗礼を授けたヨハネの働きです（使徒一〇・三七）。

洗礼者ヨハネ、彼はずいぶんと変わった人でした。何よりもその衣服、その生活スタイルです。聖書によれば（マタイ三・四）、らくだの毛衣を身にまとい、皮の帯をしめ、いなごと野密を食物としていた。文明に背を向けるかのように、ユダヤの荒野ヨルダン河の谷あいを住処としていました。

しかし彼はそのような変わった外見だけでユダヤの民衆の注意を引いたわけではありません。むしろ彼が発したメッセージに人々は耳をそばだてたのです。神の国の接近であり、神の怒り、裁きが差し迫っているというメッセージです。それはユダヤの人々を震撼させた。悔い改め、それにふさわしい実を結ばなければ、いまの生活を根本的に改めなければ神の怒りを逃れることはできない、人々のところに深く突き刺さったのです。

その彼のもとにユダヤ全土から群衆が集まってきました。あらゆる階層に及んでいました。徴税人もいれば、兵士もいました。エルサレムからも来ました。ファリサイ派やサドカイ派など、当時の宗教の指導者たちも来たのです。彼らに対してヨハネは一段ときびしく神の怒りを語っています。ただし彼らを追い返したとは書かれていません（三・七以下）。

この要求を受け入れた者にバプテスマが施されました。彼の施すバプテスマは「ヨハネのバプテスマ」と言われ、それゆえ彼は洗礼者ヨハネ（バプテスマのヨハネ）と呼ばれたのです。

彼の悔い改めの要求は社会のあらゆる人びとに向けられ、例外はなかった。宗教の指導者たちにも及んだことはさきほど申し上げた通りです。王にも求められた。じっさい王こそもっと高い尺度で測られて当然です。ヨハネはヘロデ王に対し、王が自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアを不法に自分の妻としたことできびしく批判したのです。そうした結婚は律法に照らして許されない、姦淫だと。宗教の指導者も民衆も口

をつぐんでいた。しかし彼はきびしくそのことを指弾した。そのために彼は捕らえられたのです。

2 あなたですか、それとも・・・

彼のもう一つのメッセージは自分の後から「来たるべき方」が来られるということでした。

メシアを待ち望んでいた民衆はもしかしたら彼がメシアではないかと皆心の中で考えていたというのです。それに対してヨハネは、自分はメシアではない、むしろ私の後から来たるべき方は来られると証したのです。

そのヨハネが捕らえられ、死海のほとり、マケラスの砦につながれ、すでに一年がたとうとしています。ヨハネが彼こそと期待をかけていたイエスの噂はたしかに獄中にも聞こえてきます。しかしそれは彼が予想していたようなものではない。ヨハネは深い焦燥と疑惑に捕らえられていたに違いないのです。それが次のような問いなのです。

ヨハネは牢の中で、キリストのなさったことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、尋ねさせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、他の方を待たなければなりませんか」(二〜三節)。

確実なことは分かりませんが、イエスは神の国の宣教に立つ前、一時期、洗礼者ヨハネのところに行ったといわれています。洗礼を受けたのもこのヨハネからでした。ヨハネは、そのときから、イエスを「来るべき方」として、神の国の建設者として期待していたといっていると思います。その期待が、どれほど大きなものであったか、それがこの問いの背後にあります。

ヨハネの期待が大きかったからこそ、この問いは彼の深い危機感ともいうべきものを反映していました。「ヨハネは牢の中で、キリストのなさったことを聞いた」とあります。ヨハネが期待していたことと、彼がイエスにおいて見聞きせねばならなかったこととの矛盾の中からこの問いは生じてきたのです。ヨハネが考えていたのはおそらく彼以上にきびしく神の道の実践を要求し、そうすることによって神の国を立て上げるような方であった。しかしイエスにおいて彼が知ったのは、そうした方ではなかった。イエスは彼の期待とはまるで反対のことをしていた。これが来るべき方なのか、これが待望のメシアなのか。かれは失望にも似た疑惑に捕らえられざるを得なかったのだと思います。

こうしたヨハネの状況を、試練、試みとして理解している人がいます。言葉を換えていえば、神に徹底してより頼んでいる人に、期待通りにならないというところを生じる、いわば一つのつまずきです。そう考えれば、ヨハネの問いは、私どもの問いであると言ってよいではないでしょうか。

私どもの信仰も、しばしば、こうした絶えざる疑念にともなわれてあるほかないか

からです。私どもが、いや、私がより頼むのは、本当にあなたですね、あなたでいいのですね、と私どもも心の深いところでそう問うていることがあるように思います。私どもの個人の生活においても、社会における生活においても、あるいはもっと大きくいえば、この世界の状態においてもです。年末を迎えて、今年一年を、否応なく振り返るような時です。どのような希望を来年につないでいくか、あまり気の晴れない日々です。私どもの祈りが無力に思われるとき私どもは心の中で、洗礼者ヨハネのように、あなたですね、あなたにこそ、より頼んで、信頼して歩めばいいのですねと問うているのです。

こうしたヨハネの、また私どもの問いはそれ自身決して不信仰のしるしではありません。もし不信仰がいわゆるべきなら、そのように問わないところにあるのではないのでしょうか。アドベントは待つ時です。待つというのは、こちらに答えはないということです。答えを向こう側に、神に、期待するということです。その点で私どもはヨハネに学ばなければならぬのかも知れません。

洗礼者ヨハネは、権力を恐れないその態度のゆえに、民衆の関心と尊敬を集め、預言者ともエリヤの再来とも称された人です。しかもかつてはイエスの先生でもあったのです。その彼が、いま己を低くして、問うのです。体裁や面目が問題ではない。彼はじめに尋ねるのです。イエス・キリストその方に。ここにこそ、もつとも優れた姿における洗礼者ヨハネの信仰を見る思いです。彼はまたその意味でも私どもの信仰の先駆者です。

3 イエスの答え

弟子を介しての洗礼者ヨハネの問いに対しイエスはこう答えておられます。

イエスはお答えになった。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えない」
(四節)。

ヨハネの質問は、メシアはあなたなのか、それともあなた以外の人なのかという直接的なものでした。その問いにイエスはここで答えていないともいえます。しかしどうでしょうか。ふつうに考えて、自分がそうだと言っても、それは証明にはならないのです。

イエスがしたのは、ヨハネがそのことのゆえに深い懷疑におちいった当の彼のしていることを伝えることでした。もう少し正確に言えば、そこで何が起こっているかを伝えることにありました。そこでじじっ起こっていることが伝えられなければならないのです。

何が起こっていたのでしょうか。

目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、らい病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らさ

